

古代故郷へのいざない

— 下浦開祭の序に於いて —

東京都在住
会員 御手洗 一 而

はじめに

下浦（米水津・蒲江町の海岸）の歴史を調べるとき、この地域の海岸線が、^{おさうど}落人の隠れ場所として、最適の土地であることが実証されてくる。その落人や流着者が、それぞれに部族的文化圏を形成しながら発展してゆくのは、中世以後である。

古代と分類される時代は、海人族の住みついた土地でありながら、その族神を祀る祭祀の伝承さえも、聞いたことがない。ただ一つ、^た煙ノ浦の伊勢守神社が、神話にまつる祭神を伝えるぐらいで、例えは豊前海人族から発展した宇佐神の、八幡神を祀る末社の神社に、ええも私は知らない。

だから、郷里の海人族の歴史は、海部郡や徳門郷に見えるわずかな資料を参照して類推するしか、方法がない。佐伯地方で、もっとも古い五所明神社や大宮八幡社の縁起をみると、大同年間（の創始とありながら、今日まで下浦地区には八幡神の祭祀信仰はみられず、かといって原始神の祭祀も聞かない。

（一）

一口に、「当時は、郷は開けていなかった」とするのは簡単だが、鶴見半島を壁にして、海人族の南進はさへざられ、薩摩・日向から北進する海人族の族神祭祀のいわれも知らない。そのためにも幻の未開地を手探りするようには、

昔へ昔へとさかのぼりながら、少しでも古代の実情を知る夢を追ってみたいと思う。

海人について

一般財団は、考古学の研究によって、佐伯地方に、主として喬直川流域に、旧石器時代から新石器時代人が住んでいたことを知ることが出来るのは有難い。いうまでもなく海人族の祖先である。しかし海人族といってもどこから来て住みついたものか、同族系統が異種族か、海人の重要性を説きながら、その研究書や専門書を手にしたことがない。

海人について、「日本古代文学（岩波）」の註には、「アマはほかには海、海士、白水郎などと書かれるが、一般に漁業と航海に習熟した海辺の漁民をさす」と、一般的な定義をしている。

「アマ」という言葉は、海を意味する場合と、天を意味する場合とが考えられ、初めは天と意味する人もいた。天を「アマ」とすれば、上の支配階級であり、海（アマ）を被支配階級とすれば、同じ呼び名で疑問があるとか、海と天とは別系統で、海人を「アマ」という以前は、もう一時代あったのではないかとする説もある。日本上陸の騎馬民族説をとる一派は、騎馬民族と航海民とが一緒になって、日本の支配層になったとしている。

その上、稲の渡来とも関連して、朝鮮海峡を渡来した航海民（後に宗像・住吉・阿曇の族神を祀る海人族）は北方系とし、南方系は（南シナ沿岸地方の水上市民で、綿津見神（海人）の信仰をもつ）南部九州に上陸し、また揚子江流域から直接九州に渡来したという説も、近頃有力である。神武東征が隼人族の氏族神話であるとすると

説日・海幸彦・山幸彦の説話からとり、隼人が海人族であるとかないとか、研究の対象になつてゐる。もちろんこの説話が中国や南方諸民族の伝説に似てゐることも、人類学上からも研究が盛んである。

いづれにしても、佐伯地方では推定二万年前という旧石器時代の人骨・遺物が、本五村の聖獄洞穴で発見されてゐる。

海人族の風俗・習慣はどうであつたらうか。

肥前風土記によると、

交親似^ニ隼人^一恒好^ニ騎射^一言葉が俗人と異なる

と述べてゐる。また「魏志倭人伝」には
「今條の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え、文身して亦以て大魚・水禽を厭う。後稍々以て飾りと爲す。」

と書かれ、身装について文身へみちの風習が推測され、男は髪を頭の中やから両側に分け、耳の上で結び、その衣は横幅、結束して相連ね、略々縫うことなし、ムフンドシのことであらう。女子は、つづし馬田で、衣と元の夜着を中央を繋ぎ、頭からすっぽりかぶるとは、夏のいでたちであらう。

なお、この書の卑弥呼について、倭王朝、すなわち日本国家の起原に關して、北九州説や畿内説あり、あるいは北九州王朝の東征による倭（大和）の征服と、畿内自立説とあつて物議をかもしつゝゐる。

海人族の分布については、和名抄からその郷名をひらうのが手へどり早い。「海部郡」の名だけでも、武蔵・遠江・尾張・伊勢・紀伊と日本海・瀬戸内海・九州沿岸の諸地方に、約二十郡が見える。そして、紀・紀や、地

の起源説話の多い「風土記」が大へん參考になる。この海人族が、地方有長のもとに集合化され、中央政權の支配下に組み入れられていくが、その例証を身近な豊前国にとつて見たい。

中野博士の「八橋信仰史の研究」によれば、弥生時代に於ける各氏族の信仰について、その發生と移動について詳細に考察され、豊前國の形成を知ることが出来るのが有難い。必要部分も抜粋したい。

(一) 要約すると、辛國大御神——豊比咩社^{トヨヒメ}の祭祀氏族が辛鳥氏で香春社を祀り、上毛・下毛の山阿川の平野に祭展した海氏が、豊日別^{トヨヒワケ}の神を祀り、龍王社の祭祀集団となる。そして、この両神の信仰は同体として、「豊國」の行政地域を兼ねることになる。

そして、この両神の信仰は同体として、「豊國」の行政地域を兼ねることになる。

ついでに、博士はこの瀬戸の國であるアマ國が三毛國以前の名目「ヤマ國」で、後にこのヤマ國とトヨ國がヤマトヨからヤマタイと發展して、邪馬台國宇佐説きとつてゐる。

(二) 同時代に宇佐川流域に發生した宇佐氏氏、海氏の海國を統合してゆく。その例として、宇佐公池守の系譜に「海」の字を用い、宗海、行海、昌海のように旧「海氏」の名残りを止めるとして、「宇佐公池守」は海氏の子孫と推定してゐる。

この例のように、豊前國の海人であつた海氏は、他首長の宇佐氏に統合されてその名を消すが、時代が下ると姓の制度とともに、その地方の地名を冠す例が多くみられる。これらは海人族の發展變遷の歴史を物語るもので

あるが、古代水軍の編成をみると、その豪族名によって、海人族の分布や発展の過程を知ることが出来る。

次に海人族の分布や発展の過程から視点をかえて、地域的に存在する海人集団の種々のつながりと眺めてみたい。それには、新羅の王子アメノヒボコノ「志神記」の伝承について、太へん示唆に富む研究がある。

三品彰英氏の「日鮮神話伝説の研究」によれば、神功皇后ヲオキナガタラシヒメの祖と祖とする「記紀」のアメノヒボコの遍歴コースと、神功皇后の三韓遠征コースが、新羅・伊都・長門・播磨・難波・近江・敦賀・出石・出雲という点を結ぶ点において、兩者全く一致している。そして、地方首長に与えられた海軍（海部直）という姓名が、アメノヒボコの渡来地と伝える研究者もいる。

なるほど、コースを追えば北九州の海人族の豪族であった阿曇氏・國前臣・吉備氏・息長氏・御鹿氏と豪族名が浮かんでくる。「直」とは、王朝に服属した地方首長に与えられた姓とされているが、吉備氏については、雄略天皇紀（四六三）に、吉備海部直赤辰、敏達天皇紀に吉備海部直難波とあり、近江国息長郷から出たオキナガ氏は、水中に沈む海人にとつて、もっとも必要な息長とそのまき氏族名とし、敦賀地方では角鹿海直とか角鹿海部直とある。

海部の部については後にふれるが、結論から先にいえば、これらの氏族がほとんど同族とされている。姓氏録などを研究すれば面白いが、ここでは豊國の國前臣と角鹿海直との関係を見たい。

豊前の國前臣と吉備氏との関係なら、瀬戸内海を通じて理解出来るが、古代にあって関東半島と敦賀地方とは、

いかに遠過ぎる感がある。しかし「聖仁記」二年によれば、意富加羅（任那）の王子都怒我阿羅斯が、神石から化した童女を尋ねて日本へ渡り、その童女は難波に詣つて比売諸曾社の神となり、一方で豊國の國前臣に至つて、その比売諸曾社の神となつたと記されている。別伝は省くとして、この伝承は古代海人族の同族的関係が、海路の交通路によって、意外に近かつたことかと思わせる。

静岡県庵原地方に蟠居した盧原氏については、「姓氏録」の古京皇別下は、「盧原公、室朝臣と同祖。維武考命、景行天皇の御世云々」とあって、斉明天皇六年新羅征討のとき、新羅國に造船を命じた記事は著名である。こうしてみると、盧原氏、笠氏、吉備氏の同族関係は、豊後の國前臣、角鹿の海直とも同族であり、諸氏族がいつのまにか一つの親縁関係で結ばれている傾向にある。「古事記」に記されている同族系譜の成立期については、専門の研究書のあることを付記しておく。

以上外生時代から古墳時代にかけて、海人族の生態、分布、発展の過程を概観したが、地域的に単一の地方豪族の位置から、同族的な系譜につながる過程において、海人部の出現となり、中央集権（王朝）の隷属下で発展してゆくことになる。

そして、志神記三年に、阿曇連の祖大浜宿禰を「海人の率」として中央で統率し、五年には海人部が設置されている。海人部（海部）とは海産物を貢納する品部のことで、水先案内や水夫の役もつとめていた。この品部を中央で管掌するのが伴造であり、地域の集団を代表する首長に、姓の名を賜わったことは前に書いた通り海部直の如くである。そして、全国各地に設置されるが、部々

地方制度とのかかわりあい、項を改めて考えることにして、話を郷里の海部郡に定さねばならない。

神話説話と海部郡

「海部郡」の初見は、豊後風土記であり、海辺の白水郡の集落が部の設置とともに海部となり、律令政權下に国造から国司・郡司の新制度に代り、郡の設置にあたり、海部郡としたことは周知の通りである。そして、豊後風土記の編纂は天平時代（730-756）年頃とするのが通説である。しかし、その内容は地名起原説話にとどまり、「託記」をみても海人に關する記事は、豊前の土蜘蛛の比ではない。だからどうしても神話説話の事実に類らざるを得ない。説話や伝承を少し整理してみたい。

神武東征に關しては、畑の浦伊勢本神社の御神体の話と、大入島日向泊浦の「神の井」の伝説がある。

景行西征に關しては、徳門郷の郷名起原説は別にして、天皇寄港地としての「宮ノ浦」の問題、また西上浦宮、内近の「幸」の地名、天皇の鎧を乾した岩という上浦所、戸先の「鎧ばやし」の話、戸穴が土蜘蛛の住んでいた穴であるという口碑などがある。

しかし、神武説話は現在では一般に否定的見解が有力であり、景行天皇の九州巡幸説話にしても、熊蓋征伐は日本武尊の物語を二重にした性格をもち（津田説）、坂本説では、中央知識人の机上の制作ではなく、九州地方の説話の伝承としている。そして託記とも西征のコースが海路である確実な記事はみられない。

海部郡に關しては、国神珍考の話が一つの起りどころだけである。すなわち、「速吸の門」といわれる難所を水先案内した功により、推振津考の名を賜わった話であ

る。しかし、古事記では吉備から大和に入るコース順であり、国造研究の視点からは異説をとなえる人もいる。珍考について、神武紀では「珍考を以て倭国造と爲す」とあり、記では「推振津日子と名号を賜ひき。此は倭国造等の祖なり」とあるところから、珍考は倭地方の豪族の首長で、「明石ノ門」に出迎えたのであり、海部の一酋長が直ちに倭国の国造に任命されるとは考えられないとしている。そして以後の珍考については何の記載もない。

「太宰管内志」によれば、早吸日女神社を延喜式に彼也須比売と讀ませ、「速吸比咩社ノ記」に、佐賀郷速吸日女神社六座として、惣上命、大直日命、底土命、大鏡津日神、赤土命、大地海原諸神を祀るとして、原始海人族の信仰神をあげている。

佐加郷で、この波也須比売あるいは速吸比咩神を族神として祀る海人族と珍考との關係、またこの族神社の分布、及び前記したどの海人族の係累につながるものかと思案している。それに当地方の猫塚古墳、馬場山古墳、築山古墳を考え合わせると、この地域が郡の中心地であったかと察知させ、現在では、海部郡家の所在を坂ノ市所旧小佐井村と丹生村の間にあったとする新しい考え方がある。臼杵地方には、白塚古墳や下山古墳が五世紀前半に出現するが、徳門郷の佐伯地方は、古墳もなく、早吸日女神社のような氏族神祭祀の原初的形態はみられない。徳門郷はまだ充分振付いていなかったと思えるが、のちに郡の大腰と成った「海部公常山」や、「海部君族手婆虎」の名は、郡家に近かった海人族酋長として、速吸比咩神を祀る氏族の關係について研究が残される。この海部氏については、現在まで出自未詳とされている。